

## 国際協力特別賞

「新しい世界を一緒に見たくて」

桐蔭学園中学校 3年

鈴木 華子

私は、服を買うことが好きだ。新しい服を着ると、今までとは違う世界が見えてくるからだ。私は、その日も新しい服を着て満足していた。トンネルに入った電車の窓に、自分の生きいきとした顔が映る。しかし、その隣にあった広告を見て、体に衝撃が走った。そこにはこう書いてあったのである。

「300万着足りません。」

その途方もない数字の隣には、私と同年代の女の子が服を着て、幸せそうに笑っていた。私と同じ表情をしている。違ったことは、生まれた場所だけだった。もう一度、窓に映った自分の顔を見る。確かに幸せそうな顔はしていた。でも、広告の少女と目が合ったあとに見ると、その幸せはどことなく空っぽに見えた。

帰ってから、いてもたってもいられず調べた。世界には、食べ物もなく住む家もない人々がたくさんいることは知っていたし、本などを寄付したこともある。でも、彼らと私が同じ世界にいるという実感はあまり湧かなかった。しかし、今、大好きな「服」というもので世界と私が繋がったのだ。この世界に、戦争などで自分の居場所を追われた人は、6,550万人もいる。そして、4秒に1人増え続けている。そして彼らは追いやられた場所でも、飢えや病気に追われているのだ。私は考えた。なぜ一生懸命彼らは戦うのかと。こんなにも酷い状況で、なぜ希望を見失わないのかと。彼らの願いは何だろうと。答えは1つだった。「生きたい。」その強い思いが彼らの心に宿っている。だから、服が必要なのだ。私たちの様に、おしゃれを楽しむのではなく、病気や寒さから身を守るために服を着るのだ。電車で目が合った少女を思い出す。あの笑顔は、私と同じ笑顔ではない。もっと力強く、生きる力に満ち溢れた笑顔だったのだ。

私はたくさんの服が入った袋を両手に持ち、広告のお店へ行った。その箱はすぐに見つかったが、その大きさに比べ中身は少なかった。しかし、ゼロではない。私の近くに、何がきっかけかは分からないが、力になろうとしている人がいる。それだけで嬉しい気持ちになれた。私が寄付する服も、家族に説明して家中から集めてきたものだ。今度友達や先生にも話してみようと思う。たかが300万分の10着かもしれない。それでも、それでもその小さな一歩が、困っている人の原動力になるのだ。服を買うとき、私には新しい世界が見える。でもそれ以上に、服をボックスに入れたときに見えた新しい世界の方に感動した。この服を着る人にも、新しい世界が見えます様に。私はそう願って、服をボックスに入れた。